探検實記　地中の秘密

深大寺の打石斧

江見水蔭

青空文庫

――一ヶ所で打石斧二百七十六――肩骨がメリ〳〵――這んな物を如何する――非常線――荏原郡縦断――

余の陳列所の雨垂れ落に積重ねてある打製石斧は、數へては見ぬが、先づ謙遜して六七千箇は有ると云はう。精密に計算したら、或は一萬に近いかも知れぬ。

これは地の理を得て居るから、斯う打石斧を多く集められたのである。玉川沿岸には打石斧が多い。其處の何處へ行くのにも余の宅は近く且つ都合が好い。

それに余は蠻勇を以て任じて居るので、一度採集した物は、いくら途中で持重りがしても、それを捨てるといふ事を爲ぬ。肩の骨が折れても、持つて歸らねば承知せぬ。

人は打石斧かと云つて、奇形で無いのは踏付けた儘行くが。余は其打石斧だらうが、石槌だらうが、何んでも彼でも採集袋に入れねば承知出來ぬ。

故に、どんな不漁の時でも、打石斧を五六本持つて歸らぬ事は無い位である。

打石斧の一番多かつたのは、深大寺である。此所では先輩が、矢張打石斧を澤山採集した。

何もそれを目的といふ譯ではなかつたが、三十六年の六月二十三日であつた。望蜀生と共に陣屋横町を立出でた。

此日は荏原郡縦斷を試みるつもりであつた。

先づ權現臺、大塚、洗足小池、大池と過ぎ、祥雲寺山から奥澤へ出た。

此邊までは能く來るのだ。迂路つき廻るので既に三里以上歩いたに關らず、一向疲勞せぬ。此時既に打石斧十四五本を二人で拾つて居た。

それから下野毛、上野毛の兩遺跡を過ぎ、喜多見へ出た。

大分疲勞して來た。

路傍の草の上に腰を掛けて、握米飯を喫し、それから又テクリ出したが、却々暑い。

砧村の途中で磨石斧を拾ひ、それから小山の上り口で、破片を拾つたが、既う此所までに五里近く歩いたので、余は少しく參つて來た。

八王子街道を横切つて、いよ〳〵深大寺近く成つたのが、午後の五時過ぎ。夕立でも來るか、空は一杯に曇つて來た。

深大寺の青渭神社前の坂まで來ると、半磨製の小石斧を得た。

それから横手の坂の方へ掛つて見ると、有るわ〳〵、打石斧が、宛然、砂利を敷いた樣に散布して居る。

望蜀生と余とは、夢中に成つて、それを採集した。其數實に二百七十六本。それを四箇の大布呂敷に包み、二箇宛を分けて持つ事にした。

振分けにして、比較的輕さうなのを余が擔いで見ると、重いの重くないのと、お話にならぬ。肩骨はメリ〳〵響くのである。

蠻勇に於ては余よりも豪い望生も、少からずヘキエキして見えた。
それで一先づそれを、雜木林の中へ擔ぎ込んで。
『如何だ、此邊へ隱して行かうか』
『然うですな、埋めて置いて、今度來て掘り出しますかな』
話して居る處へ、突然、林の中から、半外套を着た、草鞋脚半の、變な奴が出て來た。
夏、黒羅紗の半外套、いくら雨模樣でも可怪しい扮裝だ。
此方からも怪しい奴と睨付けると、向ふからも睨付けて。
『おい』と來た。
『何んです』と余は答へた。
『何處から來た』と又問ふ。は、はア密行巡査だなと覺つた。
『東京から』
『東京は何處だ』
『品川・・・』
『品川町か』
『然うです』
『荏原郡の品川町か』
『然うです』
『東京と云つたり、品川と云つたり、何方なんだ』
『東京府下の品川町の意味なんで・・・』
『何をしに來たのか』
『いろ〳〵調べに・・・』
『持つて居る物は何んだ』
『これは掘る道具で・・・』
『何を掘るんだ』
『石を・・・』
『石を？』
人相の惡い余と望生。それが浴衣がけに草鞋脚半、鎌や萬鍬を手に持つて居る。東京だと云つたり、又品川だとも答へる。怪しむのは道理だ。それが又石を掘るといふのだから、一層巡査は怪しんで。
『その埋めて隱くすとか云つたな、其布呂敷包を開けて見せろ』と來た。
此所で余に餘裕が有ると、之を開くのを拒んで、一狂言するのであるが、そんな氣は却々出ぬ。ぶる〳〵顫へさうで、厭アな氣持がして來た。
望生も不快の顔をしながら、之見ろとばかり、布呂敷包を解くと、打石斧が二百七十六本※
巡査、唖然として。
『這んな物を如何する？』
『これは學術上の參考材料である』
『這んな物は何處にでも有るぢやアないか』
『然う有るやうなら、わざ〳〵此所までは來ない』
『全體、君達は品川の何處だ』
『陣屋横町四十番地四十一番地』
『四十番地かい、四十一番地かい』
『屋敷は兩方に跨がつて居る』
屋敷が兩方に跨がつて居るといふ柄ではない。汗だらけの浴衣掛けである。が、實際余は此時、四十一番地に住し、角力の土俵を築いたので、四十番地をも借りて居たのだ。大分茶番氣がさして來

た。

巡査はいよ〳〵怪しみながら。

『それで姓名は・・・』

『エミタヾカツ』

今度は望生に向ひ。

『お前は何んだ』

『僕は此人の從者です』

從者も主人も同じ樣なのだ。いよ〳〵怪しい、今度は又余に向つて。

『職業は何んだ』

『ブンシだ』

『ブンシといふ職業が有るか』

『有る』

『あゝ文士か。エミタヾカツといふ文士かい。エミ・・・　あゝ、江見・・・　水蔭さんですか』

『然うです』

『それなら分りました』

馬鹿々々しい。聞いて見ると、強盜が徘徊するといふので、非常線を張つて居たのであつた。

斯うなると、打石斧を隱して行くわけにも行かず。強盜と間違へられた憤慨紛れに、二人はウン〳〵汗を絞りながら、一里餘の道を境の停車場に出で、其夜の汽車に乘つて、品川まで歸つたが、新宿の乘替で、陸橋を上下した時の苦しさ。——これならどんな責任でも背負つて立てると、つく〳〵蠻勇の難有さを覺えた。

青空文庫情報

底本：「探検實記　地中の秘密」博文館
1909（明治42）年5月25日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/）で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。
※「深大寺」に対するルビの「じんだいじ」と「しんだいじ」の混在は、底本通りです。
入力：岡山勝美
校正：岩下恵介
2018年8月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

探検實記　地中の秘密

深大寺の打石斧

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　江見水蔭
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/